



六花

10

2020

りっかはいくかい

山田六甲

夜泣き椿

紳九

夏雲や健康保険発祥地
 象潟の穂波あかりや合歡の豆
 岩牡蠣は海女神の舌絡みくる
 象潟や立ち去りがたく稲うねる
 夏料理燻りがつこに歯がたたず
 法の山行者が滝に転びけり
 熊ひそむ鳥海山の山ぶだう
 象潟や九十九島を稲の波
 夜泣くと蚶満珠寺の椿の実
 暑き日に肘を灼かれて川下り

八月、あの世に片足入れた男と
 その嫁の三人が奥のほそ道逆
 打ち行脚に秋田、山形まで行っ
 た。
 来年はもうないと決心しての
 旅だが、その地に立つと見えて
 くるものもあって有意義だっ
 た。

いざ「象潟」に立つと、松島の句を残さなかった芭蕉の意図がふと胸をよぎった。「松島やあは松島や松島や」の作者は松尾芭蕉ではなく「田原坊」という説もあるらしいが「あまりの美しさに言葉が浮かばずこう詠むしかなかった」という逸話は俳人を侮辱している狂歌以下。芭蕉は「象潟」で「闇中に模索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色またたのもしきと唾（あま）の苦屋（とまや）に膝をいれて雨の晴るるを待つ」と書いている。これは天龍寺の僧策彦（さくげん）の詩で「蘇東坡」が西湖の多くの美景は、晴雨いずれの時も素晴らしいと詠じた詩句を思い出して暗

七夕の救急病院声ひそか
 夜もほてる湯殿三山立石寺
 雲の峰夕暮るるまで月の山
 山寺の蝉は早寝や月欠けて
 みちのくの空は低かり星月夜
 鳥海山の裏返りたる昼の月
 鳥海山の溪に切れ込む秋の空
 目の前を帰燕のつばさ峪深し
 船頭の片手拝みや神の滝
 右に神左に滝や最上川

がりの中ながら西湖の風光を探りだしたいというのだ。それを理解していた芭蕉はずぶぬれになりながらも気持ちは浮き浮きと高揚していたのであろう。すでに象潟に来る以前に「合歡の花」と「西施が濡れている」案はずでに持っていたのではないか。だから松島は眼中に無かったと思われる。「松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。地勢をなやますに似たり」と書いているのは西施の象潟へと心は飛んでいたのだ。笑うように明るく松島は芭蕉の発句に適っていないのであろう。だから松島の詠は眼中になかったと言つてよいのではないか。「芭蕉ほどの俳人でも松島を詠えなかった」と評判が立てば立つほど象潟の句が浮上するのは兵法三十六計の六「声東撃西」を援用した計算ずくだったのか。

風鈴 ◎ 笹村 政子

万緑の祖谷の戸をたづねけり
祖谷溪の梅雨の晴間の木霊かな
落人に山の傾く袋掛
小屋の灯のひとつ灯れる出水川
祖谷溪の瀬音に濡るる合歓の花
夏うぐひす豪雨の山に鳴きとよむ
放水に生まれし虹のかけらかな
人声に震へてもみす浮葉かな
風鈴のうだつの町を伝ひ鳴る
女郎蜘蛛渡れる糸を消しにけり

△訪ねた徳島県美馬町は豊かではどんどの家が卯建(うだつ)を上げている。もとは棟(むね)上げをすることを「うだつ」といい、転じて志を遂げることがさすようになったとか。あるいは、京阪地方で、隣家との境に卯(う)の字形の防火壁(袖壁)をつけ、これを「卯建(うだち)」といった。この句はその裕福な街の軒先を、風の流れに沿って次々と街道を伝いながら風鈴が鳴り、涼しく心地よい音が伝播して走る。うだつの通りを吹く風と風鈴が見えるようである。この明るい音が涼やか△祖谷溪の木霊が落人の袖によく響いている。合歓の花が「瀬音に濡れる」という捉え方が抒情をもたらした。△人声に震えて見せる浮葉というのも軽みがあつて面白い。女郎蜘蛛の妖しさが糸を消してしまっている絡め捕られる男どもの恐怖も少し△梨の袋がけが祖谷独特の傾斜した地の苦勞を見た。△武士を捨て平家の落人たちが苦勞して血を繋いで来た歴史も想像させる。

夢風撰巻頭

夫に留守たのむつもりや胡瓜揉

升田ヤス子



明日は句会。編集長は句会にもでて指導者役を果たす。明日も家を留守にするのだから、なるべく夫の機嫌を損なわぬようにと考える。だとすれば昼食に、夫の好物をこしらえておけば、夫も機嫌を損なわずに済むかもしれない。ヤス子の年代の人は、糟糠の妻が頼りである。胡瓜モミならお茶漬けでさらにと済ませてくれるだろう。「夜にはちゃんとした料理を作つてあげるからね」だからお昼は胡瓜揉みで我慢してね、と慰めながら句会にでかけるのだろう。編集長と妻との掛け持ちなのである。

つまにるすたのむつもりやきゆりもみ ますだやすこ

はまなす抄

工芸茶

升田ヤス子

半夏生外出かなはぬ片眠り
 紫陽花や風に遅れて揺れあへる
 まだ誰もくぐらぬ茅の輪青深く
 形代に遠き子の名を書きにけり
 涼しさの広がり来たる工芸茶
 夫に留守たのむつもりや胡瓜揉
 千代紙の振り袖小袖乞巧棚
 初孫の名入りちやうちん乞巧篋
 老鶯の声音を太く城晴るる
 棚ぐもり睡蓮うなじ見せて咲き

△中国では工芸茶は花を見た目で楽しむもので、主原料は茶葉という。呑んでみたいもの△半夏生の頃は眠い。本当は外出してあれこれ楽しみたいが、今はウィルスに世間を奪われて不自由な身の上の無聊を託し片眠りしているのは体に悪い。片眠りとは、まどろむことだからね、うたたね、のこと。本気で眠れないから、生殺しの状態。「片眠り」とは上手い表現△あじさいの句はいい。他に類似した句がないかと心配するほどに紫陽花の重さの本質を掴んでいる。また紫陽花でおまじないを行う日は、6のつく日。もしくは、6月の夏至、切り花にしてつるす。金運アップや下の病氣予防など効果があるらしい△出掛ける時には胡瓜もみをしておくというのも上手い。胡瓜もみの好きなおかずを置いておく留守の機嫌を損なうことがないのだろう。ベテラン主婦らしい技あり一本夢風撰△たなくもりの睡蓮は美しい。殊にうなじは女性的△初孫の名入り提灯は思いう出になる。老鶯の句も佳し。

蟋蟀抄

糸とんぼ

志方 章子

糸とんぼ時折青く光りけり
 夏蝶の葉裏に日差し避けてをり
 水鉄砲に打たれてやりし日も遠し
 一回り大きな日傘買ひにけり
 いつまでも座つてゐたき川床涼み
 アイスクリーム銀のスプーンに掬ひけり
 赤富士の描かれし扇燃ゆるかな
 夕焼の心に沁むる齡かな
 見る夢のいつもと違ふ籐寝椅子
 裏道を行くや日傘の触れ合ひて

△主人のは病氣らしい。そのことが章子の境涯が開けつつある△水鉄砲は使い古された光景。遠くにある過去が目の前に甦っている。子供の撃つ水鉄砲にわざと撃たれてやっただ日もかなり昔になった。子ども達も小さく懐かしく、自らも若かった思い出に生きていくのである。女性は思い出に生きていくける△女性向き的小さな日傘も今はファッションにかかわりなく紫外線を防御する方に力を尽くすようになった。少しでも美しく長生きしたいのは女性のたしなみ△川床涼みは「ゆか」と読んだら鞍馬と、京都はしきたりにむつかしい△籐寝椅子(どうねいす)の寝心地が何か違うのだという。籐の違ひよりも生活の変化によるものが△日傘が触れ合って鬱陶しいが、それでも裏道を行くというのは何かわかるような気がする。この句はある精神的なことを突いていて面白い。扇の句、赤い色で描いた富士の絵の扇で燃えているように見えるのだろう。色だけでも暑苦しい。暑苦しい色でも扇は涼しいというなら。

作用抄
青山河

大内 幸子

教会の庭サボテンの磐に咲く
初蟬の途切れ途切れてそれつきり
蟬の穴見当たらずして松の下
梅雨明けて転ばぬやうに大濯ぎ
梅雨明けのカーテン揺らす読経かな
青田風後押しさるる杖の径
佇みて鴉の荒らす西瓜畑
精霊舟編み青竹の帆を射しぬ
宮山の白鷺の群花ざかり
暑中見舞三色ペンの赤残る

山稜抄

片かげり

藤生不二男

行商の荷を下ろしたる片かげり
斑鳩の低き土塀や夏つばめ
さみだれの水輪かさなる代田かな
夕菅に風のさはりて行くことよ
紫陽花のいづこも毬のはみ出せり
うすものの縞のにじめる薄暮かな
中庭に灯の入りにけり竹落葉
噴水の虹をたたみて了りけり
子子の沈みては浮くあそびかな
尾道は坂の町なり釣忍

△藤生不二男俳句の世界。行商は最近見かけないが山間部に来た行商人は担いだ荷を下ろすにも片影に下ろしてしばらく涼む。不二男の子供の頃の景色か。将来こういう行商がはやるかも、限界集落の老人には助かる△代田に降る雨は苗を植えてもいいよという△台図。雨音が心地よい△ユウスケは哀しい花、夕方咲いて明け方にははむ一夜花。夜訪問する男と女の物語△噴水の句は巧い。「虹をたたみて」が眼目。紫陽花の鞠がはみ出すのは塀であろう。色もはみ出す。中庭は京都の町屋か。奈良の南柯句会も町家で一杯やりながらの句会。良い風情で竹落葉が明るい。△子子（ぼうふり）に罪はないが、育つと人を刺す蚊に変身して目元でささやく。それだけで痒い。必死で上下しているが不二男は遊びと捉えた。私には手を使わずにスポンを脱ごうとしているようにも思える。△尾道は林芙美子と縁が深く、狩行先生も尾道で青年期を過ごされた。釣忍も坂道の夏の風物。坂の町で植木鉢などは置けないから夏の涼を感じさせるには適っている。

連絡が遅れていたので幸子は今月号から10句を発表。高齢にもかかわらず力強い句を生んでいる。△初めて聞く蟬の声が途切れ途切りに鳴き、ついに聞こえなくなった。やがてその蟬も煩いくらいに鳴くだろう。初蟬らしい聞き方である。最初の蟬はまだ鳴き慣れていないのだ。△蟬の穴を見るのも夏の楽しみ。穴の数だけ飛び立ったとは限らない。地上へ出て上手く翅を開くことが出来なかった者もあるに違いない。松の木の下も今年は見あたらないなあと心配。散歩の途中涼しい青田風に背中を押されて心地よい散歩ができる健康の幸せ。△西瓜畑をカラスが来て食い荒らす。一個の西瓜をすべて食べきるのならまだですが、ちよつと突いてまた別の西瓜を食べ散らかすのが鳥頭（とりあたま）。お百姓さんは嘆き怒る。△佐用では今も精霊舟を流す。その姿を俳句に詠み残すのも俳人の務め△暑中ハガキを書きあげると、赤色が残った。水色を多く使ったことがわかる△白鷺のねぐらであろうか、花が咲いたように止まっている光景。

野遊抄
片白草

住田千代子

日の匂ふ枇杷の袋を破りけり
紫陽花やきのふと違ふ雨の色
睡蓮をつないで深き水の闇
枇杷の実や遠き記憶の父をふと
片白草風の暗さを樂しめり
この先は崖とぞ赤く蛇莓
奥山の野の憂ひとも夏薊
蜘蛛の囀の裏側の山眩しかり
旧姓の母の裁ち台乞巧棚
星今宵湯上がりの髪濡れしまま

△枇杷の熟した袋をいよいよ取る。紙袋が色褪せたのは枇杷が熟した目安で袋を外そうとすると豊かな太陽の匂いがした。日の匂いは爽やかな匂い。しかし甘い水分がたつぷり。△雨の色が昨日と違うのは紫陽花の色が変わったから。それを雨の色に転嫁して見せたのが佳い。夢風撰候補△片白草は半夏生草のこと。その頃の風の暗さを樂しむという表現にこの人の風雅の進歩を見る。夢風撰候補△崖つぶちに見事な赤いイチゴがある。思わず手を伸ばそうとするがその先は崖で落ちるのを覚悟で採りなさいというのだ。私なら命を捨てても手を伸ばして採る。△奥山の夏薊は可憐な刺がある。色の鮮やかな紫も野の愁いであるという思いが哀れ。千代子は女性の危なさを詠む何かを掴みかけている。△母上の旧姓が刻まれた裁ち台を使って乞巧棚を作って七夕を祀る。子供のころの母の想い出が今に生きている。七夕の夜湯上りの濡れ髪が艶めかしい、夕涼みを兼ねて二星に思いを馳せる。

聖五月抄
青芝

善野行

眼を病める師を黒南風の夜に思ふ
四阿をおほふ葉騒や梅雨兆す
蜂死んで蟻の神輿となりにつけり
授業待つ間を中庭の新樹光
天井の染みを見てゐる梅雨さ中
色褪せぬ青き花びら水中花
紫陽花を見るそれぞれの傘の色
青芝の足裏にやさし雨あがり
梅雨空や薔薇のしめりの石畳
山稜の遙かや梅雨の稲美町

△善野行は句集「聖五月」を邑書林から出版。五月ころ出るはずだったが九月になった。中身に相応しい装丁△主宰の眼を氣遣つてくれるのは嬉しい△国語の講師として出る高校の庭で次の講義を待つ間に中庭の新樹に癒されて次の授業に備えている教師の真剣さが伝わる△水中花の美しさもだが、いつまでも色あせないのは却って飽きが来るのである。人口色の哀しさ。△紫陽花を愛でるそれぞれの色の傘に個性があることよ、との気づき△裸足で青芝を歩いて見ると芝の青さと柔らかさが伝わってくる実感の句。梅雨時期のバラ園ではバラ色の湿りが感じられる感覚の句。靴を履いていてもバラの色、花びらの湿りも感じ取るのは詩的。微妙なところを詠むのはむづかしいが成功している。山稜をはるかに望んで兵庫県稲美町に立っている。稲美町は日本武尊の母親の故郷。初夏は麦秋の平野、梅雨時期は見事な植田。農作物に富んでゐるところ。

永田万年青

愛の鍵

谷口一献

甘酒

片蔭や木椅子に今朝の新聞紙
 鯉の背にこぼれて来る青時雨
 燕の子巢から半身を乗り出せる
 荒梅雨や夜中に叩き起こさるる
 とこしへの愛を語りし乞功奠
 乞功奠子に教へつつ吾も知る
 夜中まで裁縫の母乞功奠
 浜風の芝渡り来て涼しかり
 白南風や岬に錆びし愛の鍵
 白南風や的に飛びつき犬戻る

緑蔭を出て腹の虫鳴きにけり
 今日葉の色になりきり雨蛙
 七夕や色素麺の五六本
 短冊に字余りの句や乞巧奠
 蕎麦すすする誰言ふとなく昼麦酒
 冷し酒喉の佛に供へけり
 億劫の一語に尽きる夜半の夏
 ミディアムに日焼けした娘の白い爪
 居酒屋の奥の座敷の夏暖簾
 先づうなぎ頬張つてゐる櫃まぶし

△朝方は片蔭になるベンチに来てみれば、もう誰かが座つてここで新聞を読んだにちがいない。近所の老人達は朝早く目が覚めるから外にでて家族に迷惑を掛けぬよう気遣っている可哀相な人生なのだ。そういえば私も可哀相な老人なのであることよ。夢風撰候補。
 △青時雨とは、青葉の木立から落ちる水滴を、時雨に見立てた語。
 △夜中に荒々しく梅雨の雨が兩戸を叩き、目が覚めた。もういままら二度寝はできない。どうしてくれるんだ、といかり心頭に。今から掃除機を掛けてやろうと想っている。△とこしへとは永遠末永く愛を貫くと乞功奠をこしらえて乗ったこともあったなあという感慨。母は夜中まで裁縫して子供の日夕祝いの浴衣を縫ってくれた。感謝、と乞功奠を飾りながら思い出して涙する。子供たちにはお婆ちゃんの苦勞話を乞功奠のいわれと昔話をする。生活の中の生

△緑蔭で一休みしていたのだろう。妄想にふけっていたのか重要な案件を練っていたのか、ふと気がつくとき空腹を感じたのである。△雨蛙は保護色の綺麗な緑色になって身動きしない。△七夕には五色そうめんというのが伊予内子の習い。乞功奠の短冊をみれば字余りであるという。一献の句には字余りはない。カラオケの下手な人は字余りの句が多い。△誰言うとなくというのが普通で六花には酒を飲めない無粋な人ばかり。六甲をはじめ△冷やし酒は夢風撰候補。そういえば男の咽には仏様が鎮座しておられるのだ。面白いなあ。△億劫とは一劫の一億倍だが「おっくう」と捉える人もいる。この人どつかの星でそれだけ過ごして来たのだろう。地球は暑くてもう力が抜けてしまつて△肉のミディアムのように娘はこんがり肌を焼いた。将来染みになるのに。△櫃まぶしのウナギから食べ始めるのは外交な人で出生するのだという。

平居 澪子

十 葉

廣畑 育子

代 田

花 あげて 泰山木の深緑
 芍薬の散りし暈の仄湿り
 海虹豆つげ義春の赤い花
 凌霄花蔦のタワーに紛れ咲き
 山肌のゆれて涼しき齒朶の波
 我髪に夫の手折りし山つつじ
 仙翁花夕陽に押され下る山
 鷓の子の水面に遊ぶ陵の濠
 夏霧の帯解いてくる御陵かな
 七夕の笹によるしき墳の竹

猫池てふ変な名の池風涼し
 持ち寄りの菓子に夏越の祓かな
 坦々と生き紫の薔薇飾る
 開け放ち令和二年の七夕様
 早苗田の根方外来大田螺
 夏柳ベンチは池を囲みけり
 向き合へぬ関係もあり額の花
 七夕竹楼門海を見はるかす
 七夕竹祖母を氣遣ふ言葉あり
 長梅雨やガーベラ茎をくねらせり

△活けていた荷葉が畳に散った。その畳が仄かにしめつているように感じたのである。夢風撰候補△海紅豆はアメリカカンデイゴ。つげよしはるが好きで使う独特な紅色である。ちよつと心療内科受診をお勧めする△凌霄花は自分では立てない。何かに寄り縋つて咲く花。電柱が杉か。金網か建物かを登り咲く花。釣忍は夏の季語で羊歯であるが羊歯は裏白として新年の季語になっている。掲句の羊歯は山奥の杉などの影に多く涼しさを感じさせる。ここでは「揺れて涼しき」と言っているので夏登山の句を詠んだのであろう。やさしい句。△仙翁花は中国より京都・嵯峨仙翁寺に伝わったという撫子の仲間。だが掲句は登山の句で夏であるう△鷓の子が陵墓の濠で遊んでいる句。澪子の近くには陵が多く、彼女はそその周辺でよく句を詠む△「夏霧の帯解く」という比喩的な詩表現が佳い。夢風撰候補。七夕笹には良いが宮内庁のものでから伐れないのが残念。

△猫池とはにやんとも奇妙な名前の池。昔雪の上にあつた猫の足跡がこの池で消えていたという伝説によるらしく全国に三箇所あると言ふ。博学の女猫、育子でさえも変な名前と驚いている。地図で調べてみると六甲が夜時々温泉に行く道にあると知った。どうりでそこを通ると髪の毛が逆立つ感じがするのは猫がそうしているのかも△早苗田を覗くと大きなタニシが居る。外来種がこんなところまで来ているのだあ！と驚き桃の機公孫樹の木△池を囲むように並ぶベンチで夕涼みを楽しむカップル。一人で掛けるのは勇氣がいる。△「額の花」の句は二人の心がすっかり離れているのだろうか。そういう関係もあつたのだろうか。そういう関係もあるのだけれど。いや、額の花の様子を写生したのかも。まさか六甲ではないと思う。いつでも向き合おうよ△七夕は住吉神社辺りであるう。境内の七夕飾りに楼門をくぐる海風が涼し気。

誠 出口

きぶし 滝

子育畑 廣

田 代

ぶつかりて白くなりゆく夏の川
倒木をこちらに向けて夏の川
滝しぶき水面にあたり霧になる
何に手を付ければいいの夏座敷
黄緑の次は何色手まり花
同じことくり返し書く夏の昼
一回の誤ちが仇夏の昼
夏の昼子の体罰に悩む父
野球部の練習帰り日焼の子
夏の宵まだまだ不安の父がいる

七夕の竹切りに行く他人の山
大楠を慕ふ青筋揚羽かな
空を切る昆虫網の蝶を食む
川の辺の畑の胡瓜に刺されけり
天皇のお手植の松苔清水
夢に来て別れ告げらる明易し
別れがたき人歩き出す秋の暮
名月や生死は貴方まかせにて
ねこじやらしと握手してゆく下校生
白き風遺跡に漂ふ昔人

△夏の川が合流するところに白濁が起こっているのを詠った。佳いところに目をつけたが「なりゆく」に発見の工夫が欲しい、そこから川下の流れが白くなっているのは誰も知っていること。△倒木がこちらに向いているのを向けてというのだから、擬人化しているのだ。夏座敷での料理だろうか、料理の何から食べていけばいいのか迷っている。どれも涼しそうで……。手鞠花はこれから何色に変化していくのだろうかと考えている△同じ事や同じ言葉を繰り返して書くのは心理的には失調症の傾向があるから、心を静める瞑想などもいいのではないだろうか。子供を叱って、体罰を与えていいのか悩む。秋元不死男は「子を殴(う)ちしながき一瞬天の蟬」と詠んでいる。親の悩みはつきない。△夏の夕方になってもまだまだ不安定な父がおりますよ。と悩んでいるのだ。独りで悩まずだれかの助けを借りることも必要で

△七夕の竹をひとのやまに伐りに行く。今はどうか知らないが私も子供の頃は一本くらいなら断らなくても勝手に伐れた。そのくらい大らかだったのだ。切ってきた竹を小屋根に吊って短冊や紙の飾りを取り付けた。懐かしい光景△キユウリには棘がある。今は棘の出る前に出荷されるからそういう物はない△天皇が行幸された時お手植えされた松のそばの苔から神話のように清水がでている。有難い水で冷たく涼しい△夏の寝苦しく寝たとおもったら、もう夜明け。夢は目覚める寸前に見るといふ。心配している人が夢枕にたつてさよならという。慌てて言葉を掛けるが消えた。夢の名残は頭痛が酷い△名月の句は個人のことゆえ意味不明。下校する生徒がねこじやらしに手を滑らせては帰宅へ。握手というのが佳い。夢風撰候補△秋が五行説の金行にあたるので「金風」、また、秋の色が白にあたるので「白き風」とは秋風の別名だがこの句は分るようであららない。飛躍し過ぎ。

江見 巖

肩たたき

延川五十昭

はまぐり

波が波消し去り行くや半夏生
振り花鉛筆削る折れる先
ゆつたりと団扇を使ふ父の前
ラベンダー胸に抱きて次の駅
埋立地より埋め尽くす姫女苑
病室に七夕竹の一本づつ
手の平のにぎり返さぬ四葩かな
ほうたるやぐつすりねむる力なし
魂のそつとぬけ行く夏の朝
青芒母の腕よりかすり傷

△波が波を消すというのが佳い夢風撰候補△庭先で鉛筆を削っていたのだろう。折れた芯の先を見たら捻子花が咲いていた。佳い句である△父親を煽ぐ団扇の風はやさしく、いたわりの風。若いころはせかせかと煽いでいたのに年老いた父への気遣いが自分でもわかる。自分も父も老いた団扇遣い。夢風撰候補。病室に飾った七夕竹はほんのお小さな枝笹も、病人への心遣いである。△四葩とは紫陽花のこと。病人の手を握っても、もう握り返さないほど弱っているのだらう。紫陽花はその様子を象徴△「魂のそつと」は夢風撰。今月の作品はどれも佳かった。身辺の出来事を閑にできるだけ客観的に詠んでいるから哀しみが切実に迫ってくる。△蛩の句眠るにも力が確かにいる。江見さんの本格的俳句詠の力が進歩してきたと思う。

短冊の隅の滲みや星祭り
七夕の幼き文字に願ひあり
七夕や琥珀色なる酒を酌む
天の川今年は見たし出雲崎
七夕や赤い鼻緒の下駄を買ひ
初なりの太き胡瓜をかぶりけり
胡瓜背に妻の姿を描きけり
欄干の足元腐る梅雨入雨
大塔の崩れし礎石草茂る
南朝の武人の墓や木下闇

△七夕の短冊は上下に色を滲ませてあるものがあって、赤や緑の色が祭りの華やかな雰囲気を感じている。△天の川を今年是新潟の出雲崎で芭蕉のように句を詠んでみたいという。だが今年も見ることができるとか。雨とか曇りとか、昼間に通るから見えないとか。七夕の祝いに孫娘へ鼻緒の下駄をプレゼント。孫は猫かわいがりしておくのがよい△胡瓜は昔は大きなものだった。大きくなったものは黄色だから黄瓜といったのだ。△胡瓜を背景に奥方笹子夫人の絵を描いたという。胡瓜は夏場の体温を下げてくれる旬の味である。△梅雨時になって欄干の足許が腐っているのに気づいた恐怖。熊本豪雨では鉄橋が流れたと考えられないことが起こる△後醍醐天皇が吉野に開いた朝廷が南朝、足利尊氏が擁立した光明天皇側が北朝。南朝の武士では楠木正成などが活躍。神戸湊川神社には水戸光圀が忠君正成の死をたたえて書いた石碑がある。

延川笙子

天の川亡き人に会ひ目覚めけり
夏草や三草の山の戦あと
夏草に名もなき墓標隠れぬて
武士の滅びし寺ぞ蟬しぐれ
田村麻呂太刀奉納の寺涼し
甘酒の幟はためく茶店かな
長々と背伸びしてゐる黄瓜かな
大なりの胡瓜の蔭の小さき茄子
長雨や葉蔭の胡瓜太りをり
不意の客胡瓜みやげに帰りけり

△七夕の夜亡くなった人が夢に出てきた。懐かしい銀河での再開。亡くなった人は50年間銀河をさまよっている△三草山とは源義経が平資盛を夜半に襲撃した「三草山合戦」で有名な山（兵庫県加東市）△ものふが滅びた寺に往時を偲んでいる田村麻呂は平安時代初期の武將で、征夷大將軍として蝦夷（えみし）（現在の東北地方）を討伐した坂の上の田村麻呂。△茶店には甘き家の畑が立っている。甘酒は本来夏の季語である。△名もなき墓標が佳い。黄瓜は蔓が伸びているのか胡瓜自体が長いのかを鮮明にすれば面白いが、次の句を読めば胡瓜事態が大きくなっているのが分かった。長雨で収穫のくれた胡瓜は成仏できない。句で食べるのが佳いのである。△不意の客が来て手土産がないから、胡瓜を持たせてやった。客は大喜び。延川家は裏の庭を畑に開墾している。

浜田久美子

まづ一步紫陽花に背を押されけり
山里に生きてゐる空揚雲雀
風誘ふ庭でランチや蚊遣香
青梅雨やいいこときつとありさうな
青梅雨や雫の中の日の光
恋をして蜜柑若葉の揚羽かな
梅味の柿の種買ふ走り梅雨
雨音のどこか切なげ送り梅雨
容赦なく闇を叩くや暴れ梅雨
初蟬の鳴くや忽ち風に散り

△久しぶりに句会に出ようと躊躇したら紫陽花が背中を押してくれた。△山里に空が生きているというのが詩情豊かで佳い。もちろんその空に人も雲雀も生かされているのだ大きな句夢風撰候補△心地よい涼風に庭でランチ。勿論蚊取り線香は欠かせない△青梅雨とは木々の緑を濃くする雨、木々に降る雨という意味△青梅雨は比較的最近詠まれた季語で、青が未熟という意味も含み青々しい若葉などを色彩を感じさせる季語△揚羽蝶はミカン類の葉に卵を産み付ける。そのあとは母親が子供を守るために日に何度も飛んでくる。けなげなアゲハ蝶△雨音に切ない音を聞いているのは素晴らしい才能△初蟬が泣き始めたがたちまち風に吹き散らされたのだ。芭蕉が山寺に行ったころを思い起こす。久美子は行に勧められて再登場。皆の期待をうける。

山里に